

日本語訛りの特徴について

彼を知り己を知れば百戦殆うからず、です。英語の発音学習の取り組みを行う際には、母語である日本語の特徴をまず理解し、その特徴が可能な限り英語に混入しないように努力する必要があります。このドキュメントでは、英語発音の習得の際に抑えておくべき、日本語訛りの特徴を網羅的にまとめています。

よけいな母音の挿入

英語から輸入されたカタカナの言葉はたくさんありますが、多くの場合で、英語とそれに対応するカタカナ語の間で尺の取り方、リズム、音節の数などが大きく異なります。たとえば、**strength**(強さ)という言葉はカタカナで書くとストレングスですが、英語 1 音節に対し、日本語 5 音節になっており、同じ言葉を指しているにも関わらず、余計な母音が 4 つ挿入されて音節の数が 5 倍にもなっています。**strength** をストレングスと言ってしまうと、本来あるべき尺、リズムがぐちゃぐちゃになってしまい、日本語訛りが盛大に介在してしまいます。リズムの崩れは日本語訛りのなかでも重大度がきわめて高く、なによりもまず直しておきたい訛りの要素です。

前舌母音と後舌母音の区別

adopt と **adapt** を発音するさい、一瞬戸惑うことはありませんか。これら 2 つの単語を「アダプト」と覚えていると、音の区別ができないため、いざ発音する時に戸惑うことになります。**adopt** と **adapt** の違いはおおよそ、前舌母音と後舌母音の違いです。どちらも「アダプト」であると考えてしまうと意味の区別を出せなくなり、訛りを要因とした意味伝達の不具合が生じてしまいます。

「に」の音

「なぬねの」の子音は英語の /n/ と同じですが、「に」については違い、/ɲ/ です。英語の「に」っぽい音、たとえば **needs** などの音を日本語の「に」の子音 /ɲ/ で出してしまうと、訛りが介在します。

二重母音と長母音の区別

日本語の場合、「ぞうさん」を「ぞーさん」と発音するなど、表記上の二重母音を長母音に置き換えても許容されますが、英語の場合、そのような癖はありません。日本語と同じ感覚で二重母音と長母音の置き換えを行うことは日本語訛りのひとつですので、二重母音であるべきところは二重母音として発音する必要があります。

摩擦音と破擦音の区別

閉鎖を作って内圧を高め、その空気を開放して音を出す子音を破裂音、肺気流を阻害して、空気の擦れを作った音を出す子音を摩擦音といいます。そして、破裂音と摩擦音がくっついた音素を破擦音というのですが、日本語の場合、摩擦音と破擦音の区別があいまいであり、このあいまいさが日本語なまりの要因になります。

ところで、「全然(ぜんぜん)」を発音する際、**ぜん**ぜんの「ぜ(/dze/)」と、ぜん**ぜん**の「ぜ(/ze/)」に、破擦音と摩擦音の違いがあることをご存知でしょうか。このように、現代日本語では /dze/ と /ze/ の意味上の区別があいまいになっているのですが、これを英語に持ち込んでしまうと日本語訛りの要因になります。

たとえば、**goods** /godz/ という単語には有声破擦音 /dz/ が組み込まれていますが、日本語の感覚で「グッズ」

と言ってしまうと、/dz/ ではなく /z/ になってしまいます。これは、破擦音であるべき箇所を摩擦音にしてしまうなまりですので、回避する必要があります。

音素の代用

日本語にない英語の音を、それに近い日本語の音で置き換えてしまうことを音素代用といいます。たとえば、日本語にはない摩擦音の /f/ や /v/ の音が、ろうそくをフーフーするときの摩擦音 /ɸ/ やその有声音の /β/ (どちらも日本語で使われる音素) で代用されることがありますが、これは日本語訛りです。

門閉鎖の介入

日本語はマシンガンのような話し方をします。この際、マシンガンのつぶつぶの間に声門閉鎖 /ʔ/ という、声門を閉じることによる音の abrupt なストップが入るのですが、英語にこのような癖はありません。

また、日本語のア行は子音のない母音単体の音ではなく、あいうえおの直前に声門閉鎖 /ʔ/ が入っています。英語の母音、たとえば「あ」っぽい音の /a/ と、日本語の「あ」を比べるとわかるのですが、後者の場合、「あ」を発音する直前に声門に力が加わって閉じていることがわかります。

強弱の欠落

日本語の場合、明瞭に話すことがよいことであるとされていますが、英語については事情が異なります。英語の場合、イントネーション、アクセントなどの音楽的要素(超分節音)が意味伝達の機能にかなり貢献するため、丁寧に出す箇所といいかげんに出す箇所のメリハリを、露骨に出す必要があります。ぞんざいに発音すべきところはいい加減に出し、意味上重要になる音節は相対的に尺を長くとり、存在感をアピールする必要があります。日本語はマシンガンのような話し方であり、対して英語は緩急のある波のような話し方であると説明することもできます。